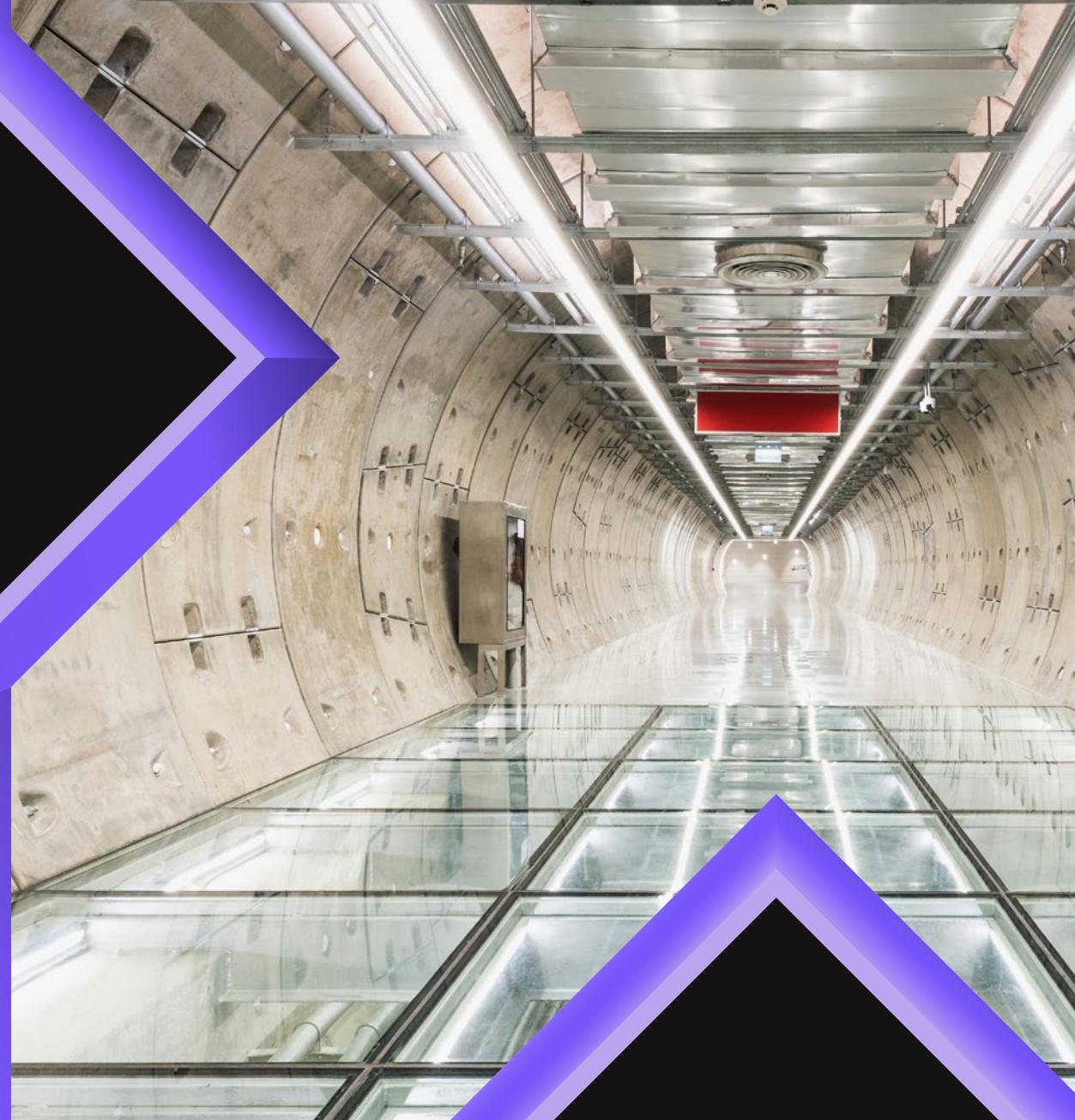


インテリジェントクラウドを 展開する: 成功に向けた7つの戦略

マルチクラウドの生産性とコストの最適化



はじめに

よりインテリジェントなクラウドを構築する

アプリケーションの爆発的な増加が現代企業を再定義しています。2025年までに7億5,000万の新しいアプリケーションが市場に流入することが予想されており、IT組織は極めて重大なプレッシャーに晒されています。こうした膨大な増加を経験しながらもITニーズを満たせるよう、多くの組織は「クラウドファースト」および「クラウドスマート」戦略を採用しています。(サイドバー参照。)しかし実際は、ほとんどのチームがデータセンターからクラウド、そしてエッジに至る、複数の運用環境にまたがる複雑な管理に苦労しているのが現実です。

こうした荒波を乗り越えるのは簡単ではありません。ただ複数のクラウドで運用しているだけでは、本当のマルチクラウド環境を有していることになりません。複数のクラウドにおいては、アプリケーションが瞬く間にサイロ化してしまい、ダイナミックな事業運営に必要となる柔軟性やポータビリティを提供できません。本物のマルチクラウド環境では、データセンターとエッジを含む、複数環境をまるで1つの環境として管理でき、同じツールとスキルセットをあらゆる場所で利用できます。

目次

はじめに	2
ハイブリッド・マルチクラウド環境を最適化する	3
戦略その1: 最適化されたクラウド移行計画を作成する	4
戦略その2: 運用を自動化する	6
戦略その3: FinOpsを採用する	7
戦略その4: データサービスの主導権を握る	8
戦略その5: クラウドネイティブの基盤を構築する	9
戦略6: エッジを有効化してアクセスを改善する	10
戦略7: AIOpsを採用する	10
Nutanixでクラウド戦略を高める	11
始めてみませんか?まずはご相談から	12

複数のクラウド ≠ マルチクラウド。

複数のクラウドはサイロ化を招いて、コストと複雑性を増加させます。

ハイブリッド・マルチクラウド環境を最適化する

組織がどのようなクラウド標準化要求を掲げているとしても、IT運用が以前と比べて圧倒的に多様性を帯びているのは事実です。オンプレミス、そして1つまたは複数のクラウドで運用を組み合わせている場合、以下のような著しい課題に直面することになります。

- 相互運用性とポータビリティの欠如。**アプリケーションは、ビジネスニーズの変化に応じてあらゆる場所で実行して、別々のロケーション間で移行できるようになるのがベストです。しかし、環境間の違いがあるため、膨大な投資がなければこれを実現することはできません。
- 不十分な自動化。**自動化はIT運用の拡張を成功させるために不可欠ですが、1つの環境の自動化だけでも大変であるため、それが2つ、3つ、あるいは5つとなると言わずもがなです。
- コストの急騰。**複数の環境にまたがる複雑な運用、不十分な自動化、そしてインテリジェントなツールの欠如によって、ITのコストおよび課題の増加は留まるところを知りません。

こうした課題に対処するには、環境をまたいだIT運用の統一、簡素化、および自動化を行いつつ、チームが継続的にクラウド環境の最適化に取り組めるよう、必要な知見を提供する必要があります。すなわち、クラウドスマートにならなくてはいけません。

本ガイドでは、よりスマートに作業するための7つの戦略について解説していきます。これによって、ハイブリッド・マルチクラウド環境(複数のパブリッククラウドならびにデータセンターやエッジ展開を含む)を合理化・最適化して、IT運用全体にまたがる可視性と相互運用性を高めることができます。

クラウドファースト vs クラウドスマート

クラウドファースト戦略では、クラウド展開が最優先されます。新規プロジェクトは、それが既存ワークロードの移行または新しいアプリの構築であれ、パブリッククラウドを対象に行われます。焦点となるのは俊敏性と拡張性であり、変化するニーズに合わせて素早く適応できるようクラウドのオンデマンドリソースを活用しながら、事前のハードウェアコストを排除することを目指します。しかし、一部のワークロードはデータセンターまたはエッジ展開のままが適している場合もあります。入念にニーズを評価してから、作業を進めましょう。

クラウドスマート戦略は、単にすべてをクラウドに移行させることだけに留まりません。この戦略は、クラウド、データセンター、そしてエッジコンピューティングリソースの組み合わせを用いて最大限の価値と俊敏性の提供を目指す、きめ細かなアプローチであり、ITインフラストラクチャーの最適化とアプリケーションワークロードの配置に焦点を当てます。

[クラウドファーストとクラウドスマートを比較した](#)詳細はこちらからご覧ください。



戦略その1: 最適化されたクラウド移行計画を作成する

IT運用、そして会社の成功は、ビジネスニーズにとって最適なロケーションでチームが重要なデジタルアセットを展開・管理できる能力にかかっています。クラウドアプリケーションの移行には、入念な計画が必要です。

アプリケーションの目録を作成しましょう。それぞれのアプリに関して、以下を確認します。

- ・インフラストラクチャー要件およびその他の依存関係を特定する。
- ・現在、アプリをどこで実行しているのか。そして、アプリをそのままの状態で実行できるロケーション(データセンター、エッジ、クラウド)はどこか?

開発者を関与させる。アプリをクラウドに移行させるつもりの場合は、開発者やその他のステークホルダーの関与を早い段階から招きましょう。そして、アプリのリソース消費量を見直して、どのリソースが必要か判断します(CPU、ストレージなど)。リソース消費量が高ければ月々のクラウドの請求額も高まるため、アプリの性能に支障をきたすことなくリソース消費量を削減できる方法を探しましょう。

クラウドプロバイダーを評価する。最良価格を探しましょう。ベンダーロックインの可能性を最小限に留められるよう、単一のベンダーのみが提供する機能やサービスは避けください。

移行に適したそれぞれの「R」メソッドを選択する。大半のアプリケーションに関しては、できる限り最小限の労力でリフトアンドシフト(リホスト)するのが理想です。しかし、改修をせずにアプリケーションを移行するのは不可能な場合もあります。これには、インフラストラクチャーの違い、または希望するコストでは期待する性能を達成できないといった場合が考えられます。評価の一環として、各アプリケーションの移行に適した手法を選択しましょう。特定の機能性を手に入れることができない場合は有意義なケースもありますが、同等のサービスが他のクラウドやオンプレミスには存在しないようなクラウドサービスにロックインされることのないよう注意が必要です。一般的に、リストの下にいけばいくほど、移行により多くの時間と費用がかかります。

- ・**リタイア (Retire)**。どのような場合でも、移行という名の重労働を始める前に、アプリが今でも会社にメリットをもたらしているのか検証することが大事です。
- ・**再購入/置き換える (Repurchase/Replace)**。レガシーアプリケーションのうち、会社のデジタルアイデンティティの一部を構成しておらず、プラスの投資収益率で移行できないものに関しては、同等の機能性を提供できるSaaSサービスで置き換えるのがしばしば優れた慣行となります。また、ITチームが抱える主要な管理責任を取り除くことができるという副次的なメリットも伴います。
- ・**プラットフォーム (Re-platform)**。アプリケーションをリプラットフォームすると、その基本的なアーキテクチャーを変えることなくクラウドに移行できます。ただし、リプラットフォームには基盤となるOSの変更、または使用するデータベースプラットフォームの変更などを必要とする場合があります。
- ・**リファクタリング (Refactoring)**。リプラットフォームをさらに一步進めたリファクタリングは、アプリケーションを最適化して、選択したクラウドプラットフォームの利点、また動的スケーリングなどの能力を活用できるようにします。
- ・**再構築 (Rearchitect)**。再構築は、最も時間と費用のかかる「R」メソッドであり、通常はクラウドネイティブな方法でアプリケーションを完全に書き換える必要があります。一般的に、これはビジネスインパクトの最も大きなアプリケーションに用います。

アプリケーションをクラウドに移行させるためのこうした方法に加えて、ほとんどの組織が検討するべき最後の「R」方法が存在します。

- ・**維持 (Retain)**。多くのITチームは、従来型アプリケーションをクラウドへ移行させようとする広範な取り組みを経た結果、一部のアプリはオンプレミスで実行し続けた方が費用対効果が高いことに気付いています。カギを握るのは、インテリジェントなワークロード配置です。場合によっては、アプリをそのままの場所に配置しておくことが最も賢い判断となります。

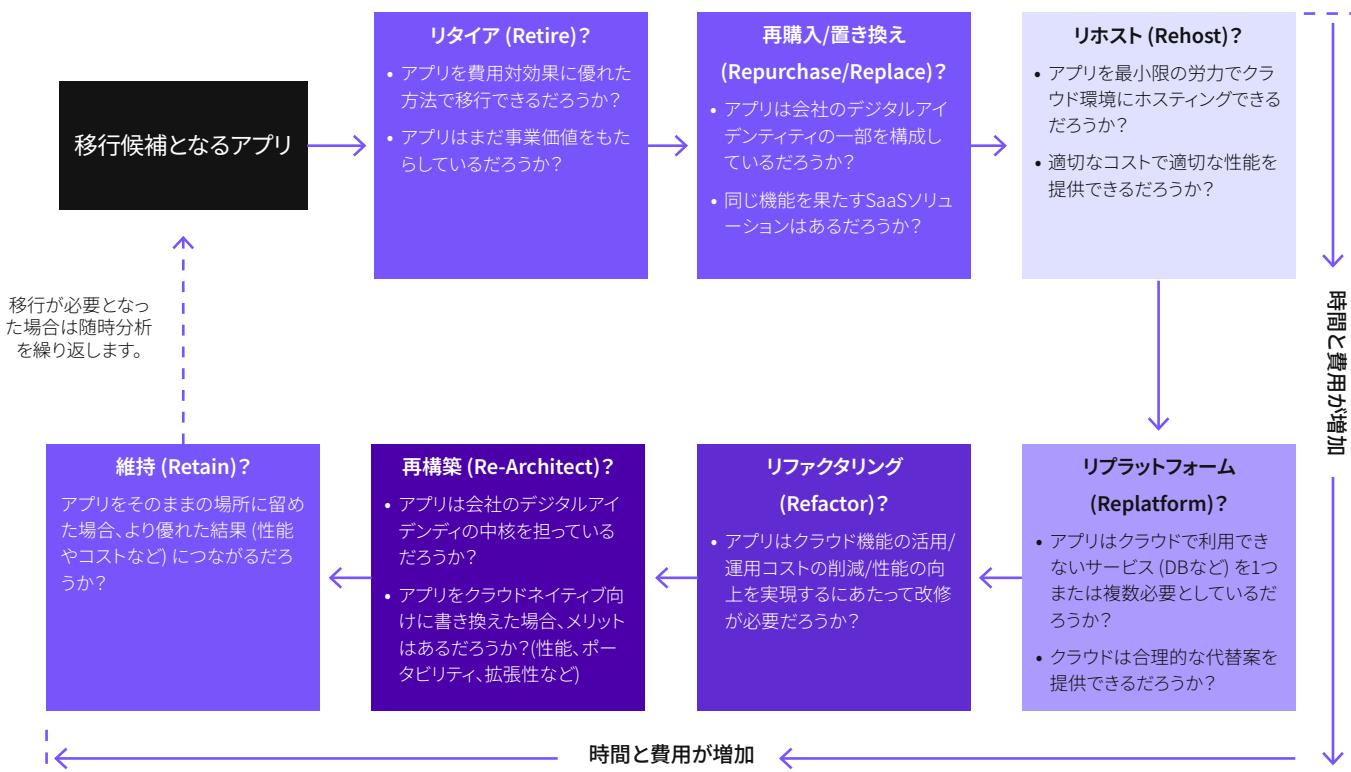
[こちらの記事](#)では、クラウド移行の詳細について入念に解説しています。



考慮すべきポイント

クラウド移行を計画していく中では、成功を加速させて柔軟性を高める、賢い選択をすることが不可欠です

- ・**パートナーと組む。**ほとんどの組織には、成功するクラウド移行を計画・実行するためのスキルや労働力がありません。適切なパートナーの選択は、ギャップを埋めてミスを回避できる、最速の手段となります。
 - ・**既成概念に捉われない。**目標とするべきことは、アプリケーションを必要な場所で、適切な性能とコスト、そして適切なタイミングの下で実行して、季節需要の高騰などのビジネスニーズに確実に対処できるようにすることです。上述の「R」メソッドも一定の役割を果たすものの、現行のアプリケーションポートフォリオを劇的な変更を伴わずに、クラウド、エッジ、そしてデータセンターなどあらゆる場所で実行できるソリューションも検討しておきましょう。



戦略その2: 運用を自動化する

世界中で2024年のIT支出は8%増加するものと予想されていますが、これは人工知能AIへの投資の増加、ならびにデジタルトランスフォーメーションのペースの加速化によってもたらされている側面もあります。同時に、グローバルなパブリッククラウドサービス支出は20.4%増加するものと予想されており、これはクラウド使用率の増加(ならびにクラウド価格の上昇)に後押しされています。運用を拡張し、さらに複雑度が増していく中で手動タスクの性能に依存していくは、失敗を招くばかりです。5人に4人のITリーダー(83%)は、ワークフローの自動化が極めて重大であると考えています。アナリティクスと自動化の向上によって、IT運用の取り組みの30%を反応的な形から予防的な形へと注力し直すことができます。

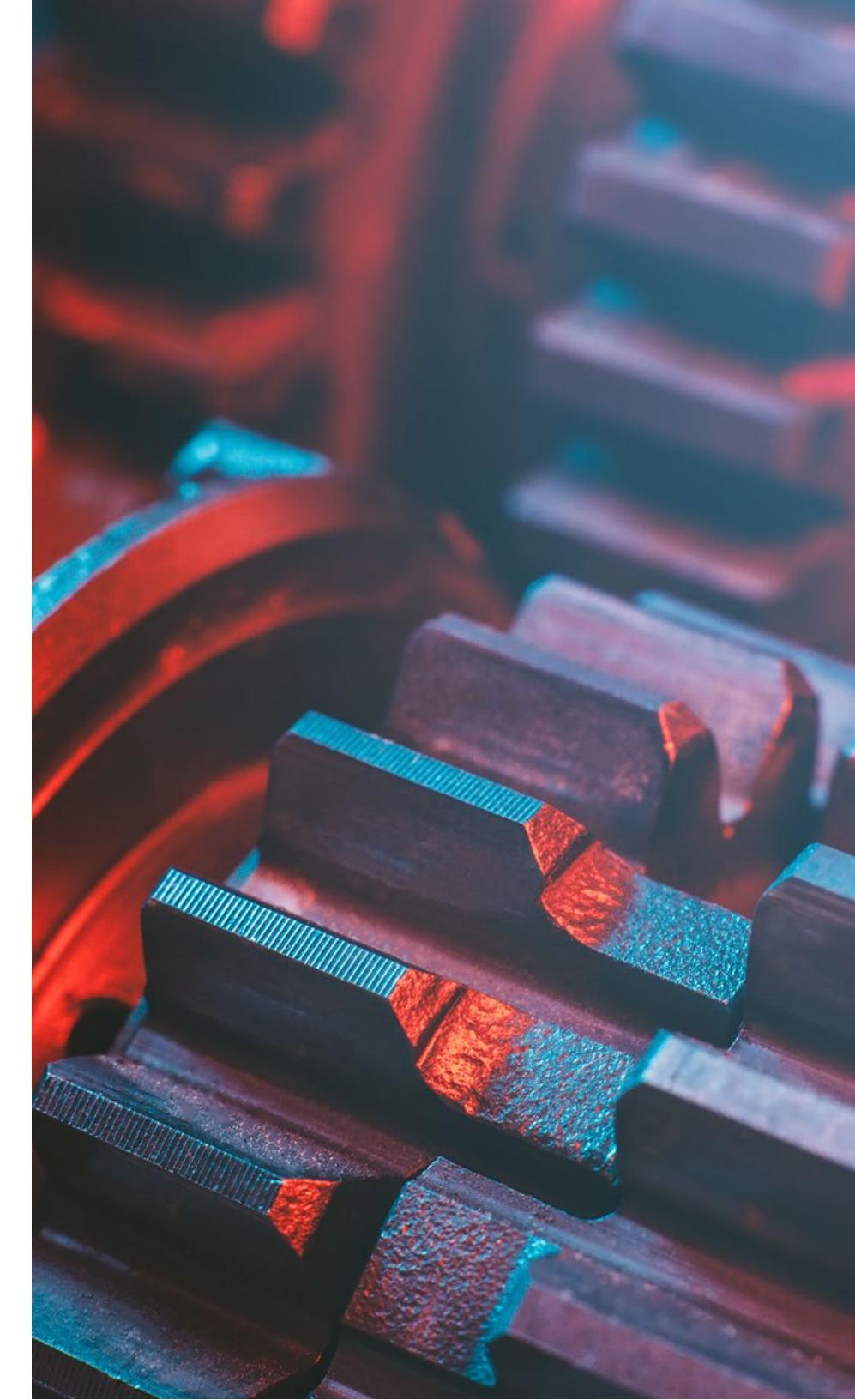
自動化はIT運用を成功させる上で不可欠ですが、マルチクラウドの自動化は依然として大きな悩みの種となります。1つのクラウドで効果的に機能する自動化ツールでも、別のクラウドでは利用できない可能性があります。この問題の重要性を理解できるよう、クラウドセキュリティについて考察しましょう。各パブリッククラウドには、それぞれ固有のセキュリティコントロールがあります。人的エラーのために適切な保護が施されていないリソースは、依然としてデータ漏洩の重大な原因となるため、複数のクラウド環境をまたいでセキュリティを自動化できるインテリジェントなツールが不可欠です。

注意していなければ、各環境の管理を別々のチームが担当する状況に陥ってしまいます。こうした高額かつ複雑なソリューションは、すべてのロケーションを単一のシームレスな環境の一部として機能させるという目標の対極にあるものです。

考慮すべきポイント

各クラウドにおいて別々のチーム、別々の管理ツール、そして別々の自動化を頼りにしなくてはならない場合、IT運用はいつになんでもそのポテンシャルを完全に発揮できません。

- **統合型管理と自動化。** IT運用を行っているすべての環境において、Day 1とDay 2の運用を自動化できる管理モデルを探しましょう。



戦略その3: FinOpsを採用する

ハイブリッド・マルチクラウドランドスケープの複雑性が原因となり、ほとんどの企業にとっての支出は最適化されていません。これは、消費量のコントロールの欠如、複数の購入オプション、そしてオンプレミスとクラウド支出の比較計算の複雑性によるものです。運用環境が増えれば増えるほど、インテリジェントなワークフロー配置に関して賢い判断を下すためのコストの可視性が獲得しづらくなります。

インテリジェントなマルチクラウドコストガバナンスは、現代のクラウド運用の長期的な成功に不可欠です。ますます多くの企業が、ギャップを埋めてコストコントロールを得るためにFinOpsに注目し始めています。

FinOpsとは何か？

FinOps Foundation [Technical Advisory Council](#)は、FinOpsを進化し続けるクラウド財務管理の規律および文化的慣行として定義しています。これはエンジニアリング、財務、テクノロジー、ビジネスチームが協働してデータドリブンな支出判断を行えるように支援することで、組織が最大限の事業価値を得られるようにすることを意味します。適切なFinOpsおよびFinOps-as-a-Serviceソリューションは、管理機能とダッシュボードアクセス性能を単一の統合コンソールに一元化して、オペレーターが重要な情報を監視できるようにします。コストの監視および管理、ならびに費用効率性の向上には、明確なベンチマークと支出メトリックがあると役立ちます。

こちらの[最新の記事](#)では、FinOpsの詳細について入念に解説しています。

考慮すべきポイント

FinOpsソリューションを検討していく中では、次の3つの主要な能力のバランスに注目することが大事です。

- **可視化 (Inform)**。データセンター、パブリッククラウド、そしてエッジにまたがる可視性を提供しながら、それぞれのコストセンターに正確な予算を割り当てます。
- **最適化 (Optimize)**。未使用または十分に活用されていないリソースを特定し、リザーブドインスタンス (RI) の購入に関する詳細な推奨を活用します。
- **実行 (Operate)**。組織全体でFinOpsの文化を育み、最適化と節約を続けます。



「コストガバナンスは、コストコントロールに必要な知見を提供してくれたおかげで、その採算を取ることができました。ある時は、開発環境上で稼働している必要のないAPIを見つけて、これを停止できたことで、1ヶ月あたり何千ドルもの額をセーブできました。」

Declan Fleming氏、UCSD、クラウド向けエンタープライズ・アーキテクト

UCSDがNCM コストガバナンスでマルチクラウド環境を管理

キャンパス上に1100のAWSアカウント（うち100アカウントは研究者、講師、管理者の主要アカウント）を抱えたカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）は、コストの把握、最適化、管理において深刻な困難に直面していました。

UCSDのITスタッフは、一貫性、セキュリティ、そして効率的なコスト管理を確保できるソリューションを必要としていました。Nutanixクラウドマネージャー（NCM）のコストガバナンスは、チームが管理オーバーヘッドに留まらず、さまざまなことに対処できる能力を提供します。

これは、クラウド消費パターンを詳しく解説した深い可視性と豊富なアラートィクス、ならびにクラウド環境をまたいだ1-クリックのコスト最適化を実現します。

導入メリット

- アカデミックおよびリサーチキャンパスのマルチクラウドにまたがる使用コストの可視性を提供。
- 自動コンプライアンスチェックと1-クリックのセキュリティ対策によって、政府および学術機関要件とのコンプライアンスを改善。
- 管理タスクを合理化および自動化eコマースアプリの要約をレビュー。
- 顧客別のマーケティングキャンペーン。
- 研究開発における予測モデリング。



戦略その4: データサービスの主導権を握る

急速なペースで進むデジタルトランスフォーメーションと複雑化の一途をたどるクラウド運用が組み合わさった結果、より多くの場所に、より多くのデータが保存されるようになりました。[2023 Enterprise Cloud Index](#)調査では、クラウド全体におけるデータの爆発的増加に焦点を当てた結果、回答者のわずか40%のみが自社データの常駐場所に対する完全な可視性を得ていたことが明らかになりました。

ハイブリッド・マルチクラウド環境におけるデータ管理に伴う困難として、以下の点が挙げられます。

- 一つひとつのクラウドでデータサービスが異なる。**現在のデータドリブンなアプリケーションは多様なニーズを抱えています。データを1つのロケーションから別のロケーションへと移行させていく中で、性能と可用性の面で同等のSLAを提供できるようにするのは大変です。
- データベースに関する課題。**他のデータサービス同様、利用可能なデータサービスならびに展開および管理ツールは一つひとつのクラウドで異なるため、データベース依存型アプリケーションを移行するのにはより困難になります。
- 複雑なデータ保護。**同じく、データ保護ツールも一つひとつの環境によって異なるため、重要なデータを不正アクセスから保護してその安全を保つのが困難になります。
- メタデータの損失。**クラウド間のデータ移行は、しばしば貴重なメタデータの損失につながります。

考慮すべきポイント

データサービス

まずは、従来型およびクラウドネイティブ型アプリケーションの双方に必要な一連のサービスは何か特定しましょう。これには、ロック、ファイル、およびオブジェクトストレージ、そしてメッセージプローカー、キャッシングサービスなどが含まれます。必要なサービスを特定した後は、それが必要となるすべての場所で利用できるようにします。こうすることで、アプリケーションをクラウド間で移行した際に運用上の困難や予想外の性能上の変更を経験せずに済みます。

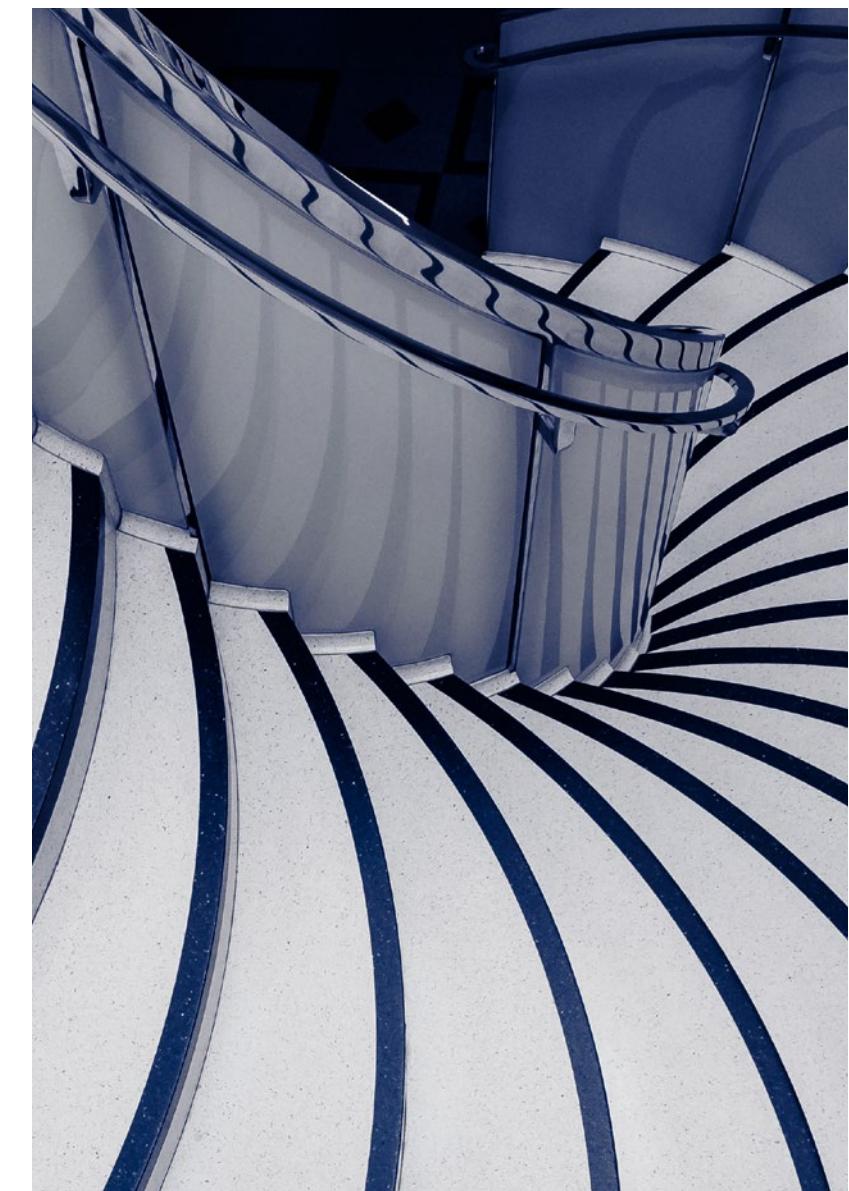
データベース

データベースにおける目標は、データベースプロビジョニングを自動化しながら、チームが利用できるデータベースエンジンおよびバージョンのコントロールを保つことでなくてはいけません。データベースへのアクセスは、役割ベースのアクセス制御で制限してコンプライアンスを確保しましょう。予め決定した保守時間枠中に、オペレーティングシステムおよびデータベースのパッチ適用スケジューリングを自動化できるソリューションを検討してください。

データ保護

提供している一連のデータサービスとデータベースを統合することで、データ保護のプロセスを簡素化しやすくなります。すべての場所で確実に十分なデータ保護を提供できるよう、データセンター、クラウド、エッジ全体のデータ保護に利用できる一式のベースラインツールを探しましょう。通常、これにはスナップショット、レプリケーション、そしてクローニングが含まれます。ストレージの効率化を果たし、性能に対する影響が最小限もしくは一切ない実装を探しましょう。

データベースの場合、統合型スナップショットはデータベースのバックアップとリカバリを簡素化できます。最適化されたストレージにバックアップのスナップショットを階層化し、データベーススナップショットから特定の時点の状態に復元してRPO(目標復旧時点) およびRTO(目標復旧時間) 要件を達成できるようにしましょう。





戦略その5: クラウドネイティブの基盤を構築する

現在実行中のアプリの大半は、VM上で稼働している従来型のエンタープライズアプリケーションである可能性が高いでしょう。しかし、現在そして将来的なアプリ開発のほとんどは、クラウドネイティブ化します。本当に賢いクラウド戦略は、両方を網羅していくなくてはいけません。

従来型およびクラウドネイティブアプリケーションは、別の管理チームを設けて別のインフラストラクチャーにサイロ化したいと思うかもしれません。しかし、サイロ化したインフラストラクチャーと管理には、座礁リソース、コストの増加、そして柔軟性の減少を含めた危険が伴います。

考慮すべきポイント

インフラストラクチャーとツールに関する選択は、できる限り最大限に両方の領域をサポートする必要があります。

Kubernetesを仮想化する。 Kubernetesとコンテナを仮想環境で実行することで、ツールやスキルへの既存の投資分を即座に活用して、クラウドネイティブおよび従来型アプリの双方をサポートする共通のベースラインを提供できます。

ポータビリティを確保する。 データサービスに関するアドバイスに従えば、必要なデータサービスを確実に利用可能にして、従来型およびクラウドネイティブアプリをあらゆる場所で容易に実行できるようになります。

- 同一または互換性のあるハイパーバイザーをあらゆる場所で実行して、従来型アプリのポータビリティを高める。

- 単一のクラウドでしか利用できないサービスを回避して、クラウドネイティブアプリのポータビリティを確保する。あらゆる場所で、互換性あるツールを備えた Kubernetesの同一または互換性があるバージョンをで実行する。

パートナー選びは賢く。 VMとコンテナの両方を理解できるパートナーを選びましょう。

戦略6: エッジを有効化してアクセスを改善する10

エンタープライズの運用は、デジタルサービスを消費者の近くで提供するためにますますエッジへと移行しています。一部の推定によると、エンタープライズデータの最大50%は2026年までにエッジで生成されることが見込まれています。また、多くの企業はAIサービスをエッジに移行して、こうしたエンタープライズデータとの距離を縮めたいと考えています。

エッジで拡張している企業の場合、ITチームはまだ十分には対処できない課題に直面するおそれがあります。これには、インフラストラクチャーのコストおよび複雑性、リモート管理、そしてアプリケーションのセキュリティおよび可用性といった課題が挙げられます。

ほとんどの企業のクラウド戦略にとって、エッジを含めない戦略は戦略として一切機能しません。

考慮すべきポイント

エンタープライズエッジにおける多様なニーズに対処するため、多くの組織はHCIベースのソリューションに目を向け始めています。HCIは、コンパクトなフットプリント、柔軟なストレージオプション、よりシンプルな管理、そして優れたセキュリティと回復力を提供できます。

戦略その7: AIOpsを採用する

人間は、エンタープライズITの範囲とその拡張に追いつく作業に不適当であることが証明され始めています。有能なスタッフを見つけるよりも先にデジタルフットプリントが拡張し続けていく中、人工知能 AIはIT運用のサポートにとって不可欠になります。モダンITは膨大な量のログデータを生成します。このため、チームは相関と異常を素早く特定して、小さな問題が全面的な障害へと発展する芽を摘めるよう、ますますAIOpsに救いを求め始めています。例えば、サイバー犯罪が増加している中、AIと機械学習は従来の手法ではなかなか見つからない脅威を明らかにできるため、被害が発生する以前の段階で攻撃を検出できる確率が高まります。マルウェアやランサムウェアが潜んでいる状況では、時間が重要なポイントになります。

考慮すべきポイント

AIOpsソリューションを評価していく過程では、以下の能力を提供するツールを探しましょう。

- **マルチクラウド運用。**求めているのは、クラウド、データセンター、そしてエッジロケーションなど、運用しているすべての環境で機能してくれる、ただ1つのソリューションです。アプリケーションは、ますます境界をまたぐようになっています。単一のアプリケーションは1つのクラウドで動作する一方で、オンプレミス、別のクラウド、またはSaaSプロバイダー上で実行中のサービスとリンクするかもしれません。AIOpsは、その利便性を發揮するためにあらゆる場所で可視性を得る必要があります。
- **最適化と改修。**リソース消費量の予測分析、リソース使用率の最適化/ライトサイ징、そして異常検知を含む能力を活用。
- **運用自動化。**異常を検知した際、ツールは自動アクションを取りなくてはいけません。
- **深い知見。**ツールは、キャパシティプランニングの簡素化、そしてインテリジェントなワークフロー配置の促進に必要な知見を提供できなくてはいけません。

生成AI。生成AIはAIOpsの新たなフロンティアであり、少ない労力で優れた知見を提供するポテンシャルを秘めていることから、組織の効率性と拡張性を高めることができます。多くのベンダーは、自社の既存製品を「生成AIウォッシング」することが予想されます。よって、先端AIに関する実績、そして生成AI対応機能に関する信頼できるロードマップを備えたベンダーを探しましょう。



Nutanixでクラウド戦略を高める

これまでに概説してきた7つの戦略に従うことで、ビジネスを成功に導くクラウドスマートなアプローチを構築できます。Nutanixは、クラウド目標を達成するまでの障壁を取り崩せるようサポートします。唯一、Nutanixだけが、クラウド、データセンター、そしてエッジにまたがる単一で使い勝手の良い統合プラットフォームを、完全なポータビリティと共に提供できます。**Nutanix Cloud Clusters上**のパブリッククラウド内で実行中のアプリは、ネイティブなパブリッククラウドと比べてコストを53%削減できます。

Nutanixがあれば、以下を行うことができます：

- クラウド間におけるアプリケーションの管理、セキュリティの確保、保護、そして移行を、すべて単一の管理プレーンから行う。
- エンタープライズグレードのモダンアプリを構築して、あらゆる場所に展開する。
- パブリッククラウドとデータセンター支出に関する可視性、チャージバック、そしてショーバックを活用する。
- AI対応のセキュアなエッジを構築する。

さらに、Nutanixは、お客様の成功を確実なものにする卓越したグローバルサポートをご用意しています。Nutanixは、過去7年間にわたって平均90+のNet Promoter Score (NPS) を獲得しており、顧客ロイヤリティおよび満足度に関してテクノロジー業界の上位にランクインしています。

Nutanixは、本ガイドで解説した戦略を簡単に実装して、クラウド活用による生産性向上を促進できるようにします。

Nutanixによるサポート

クラウド移行計画

- [Nutanixクラウドプラットフォーム](#)は、パブリッククラウド、データセンター、エッジを含む、あらゆるロケーションをまたいで稼働することで、アプリ移行を簡素化し、リプラットフォーム、リファクタリング、再構築の必要性を最小限に抑えます。
- [Nutanixプロフェッショナルサービス](#)チームは、あらゆる段階でサポートできる知識と専門性を備えています。

自動化

- Nutanixクラウドプラットフォームは、日常的なタスクをワンクリックのシンプルさで簡素化します。
- Nutanixクラウドマネージャー (NCM) インテリジェントオペレーションは、日常的な運用タスクの自動化をわずか数クリックとゼロコードで素早く簡単に、生産性を高めます。しかも、データセンター、クラウド、エッジ全体にまたがって機能するほか、すでに持っているツールとも容易に統合できます。

FinOps

- [NCM コストガバナンス](#)は、クラウド、データセンター、そしてエッジにまたがるメタリングとチャージバックに関するインテリジェントなリソースサイジングと正確な可視性を提供し、財務アカウンタビリティを推進します。
- [Nutanix FinOps-as-a-Service](#)は、NCM コストガバナンスの力とNutanixプロフェッショナルサービスチームを組み合わせて、必要なFinOpsの能力を少ない労力で提供できるようにします。

データサービス

- [Nutanixユニファイドストレージ\(NUS\)](#)は、クラウド、データセンター、エッジにまたがるファイル、ブロック、およびオブジェクトサービスを予測通りに提供します。
- [Nutanixデータベースサービス \(NDB\)](#) は、オンプレミスとパブリッククラウドにまたがるDBaaS (Database-as-a-Service) を有効にして、Microsoft SQL Server、Oracle、PostgreSQL、MongoDB、およびMySQLなどの人気のデータベースの展開・管理を簡素化します。

クラウドネイティブ

- Nutanixクラウドプラットフォームは、一切の妥協なくVMとコンテナの双方をサポートします。
- Nutanixは、OpenShiftを共同で有効化するRed Hatとの緊密なパートナーシップを含め、[ご希望のKubernetesディストリビューション](#)をサポートします。

エッジ運用

- Nutanixクラウドプラットフォームは、エッジにおける課題を解消できる、コンパクトで費用対効果に優れたフルスタックのエッジソリューションを提供しています。

AI Ops

- [NCM インテリジェントオペレーション](#)に備わったAI能力によって、チームは運用の自動化、リソースの最適化、インテリジェントなワークロード配置、そして将来的な要件の予測を、より少ない労力と優れた精度で実現することができます。



始めましょう！

あとは、クラウドにおける成功を目指して突き進むだけです。実際にNutanix Cloud Platformのテストをご希望の方のために、Nutanixの違いを体験していただける無料お試し版のTest Driveをご用意しています。

Test Driveを利用する

詳細をご希望の場合は、nutanix.com/jpをご覧ください。また、Nutanixへのお問い合わせは、contact-jp@nutanix.comまでメールでのご連絡、またはwww.nutanix.com/jp/demoからカスタムブリーフィングのリクエストをお待ちしております。

NUTANIX

contact-jp@nutanix.com | nutanix.com/jp | @nutanixjapan

©2024 Nutanix, Inc. All rights reserved.本文書に記載された、Nutanix、Nutanixのロゴ、およびNutanixのその他全ての製品、提供機能、およびサービス名は、米国およびその他の国においてNutanix, Inc.の登録商標または商標となります。本文書に記載された、その他のブランド名は、識別目的のみに使用されており、それぞれの所有者の商標となります。
EEC-Deploying an Intelligent Cloud-eBook-FY24Q3-ja-JP-05212024

